

平成 20 年 11 月 9 日(日)

2008 ツールドおきなわジュニア国際レース 報告

全国高体連推薦選手
監督 伊藤栄一郎
コーチ 徳地 末広

ツールドおきなわジュニア国際レースは、11月9日(日)沖縄県名護市を舞台に130kmの距離で行われた。

海外から、オーストラリア、香港、台湾、韓国。そして、日本からは高体連推薦選手20名の代表選手、総勢88人の選手が出場した。前日までは、例年になく暑さで、気温も30度近く、11月とは思えないような直射日光であったが、レース当日は雨で気温も低いコンディションになった。8日早朝までに国頭の指定ホテルに集合した推薦選手たちは、朝9時から、約2時間ほどコースを試走した。その後、昼食をとって、受付と開会式が行われる名護市に向かった。



今年は、20回記念大会ということもあり、名護市内でエリートのクリテリウムが行われていた。

受付、開会式会場も昨年と異なり名護市内のメイン通りを使って行われた。

開会式終了後、今年も、沖縄県自転車競技連盟理事の森さんから、激励の言葉をいただき、選手たちは宿舎に戻った。

夕食時に、積極的な走りをするように全員の選手に指示、機材、天候による走り方等をミーティングして、就寝。

レース当日は激しい風雨となり、ホテルからスタート地点に移動する時間を調整し、ホテルの体育館で待機した。

8:25 スタート予定時間だが、チャンピオンレースが通過するのを待ち、19分遅れでスタート。やや雨も小降りになったものの、気温も低く厳しいスタートとなった。



レースは、ジュニア国際の先頭集団が、チャンピオンの後方集団に追いつく展開で、先頭集団はなかなか、逃げる事ができない。そんな中、大中（京都・北桑田）笠原（埼玉・小松原）新井（埼玉・川越）黒枝（大分・日出暘谷）等の2年生がアタックをかける。残り10km地点から、大中が単独アタックをかけ、17秒ほどの差ができる。残り5kmから、野口（奈良・榛生昇陽）パルマー（オーストラリア）平井（神奈川・横浜）が集団を引き追走する。残り1kmで大中を捕らえ、今度は、平井がアタック。黒枝が猛追するが1秒差でゴール。平井は全日本ジュニアとの二冠に輝いた。2位に黒枝、3位パルマー、4位大中、5位西沢と、高体連推薦選手は上位を独占し、大会を盛り上げた。

<総括>

今大会は、指定選手の参加人数を増やしてもらい20名にさせていただいた。競技役員も高体連関係者から数人が手伝っていただき昨年よりスムーズな運営ができた。また、選手選考も強化委員会で作った年間データを参考に上位20名を選び、事前のミーティングで積極的な走り方をするように指示をした結果、外国人招待選手と高体連推薦選手がトップ集団でデッドヒートを繰り返し、上位を独占した。参加人数も年々増加しており、レースを盛り上げる意味では成功したといえる。

<最後に>

今後、前日のクリテリウムに参加できたり、タイムトライアルを取り入れたりすることにより、参加者増や盛り上がり期待できるのではないかと思います。

高体連強化委員会としても、選手の特性等をもっと研究し、日本で行われるロードレース大会をより発展させていきたいと思ひます。

今回も担当校の引率で来ていただいたにもかかわらず、多くの協力を頂いた先生方に感謝いたします。

ツールドおきなわ ジュニア国際レース130km 結果

| | | | | | | |
|----|-----|-------------|---------------|------------|----------|-----------|
| 1位 | 275 | 平井 栄一(高体連) | 神奈川県横浜高校 | 3:37:09.22 | 00:00.00 | 35.92km/h |
| 2位 | 267 | 黒枝 士揮 (高体連) | 大分県大分県立日出暘谷高校 | 3:37:10.81 | 00:01.59 | 35.92km/h |
| 4位 | 264 | 大中 巧基(高体連) | 京都府京都府立北桑田高校 | 3:37:19.53 | 00:10.31 | 35.90km/h |
| 5位 | 274 | 西沢 倭義(高体連) | 京都府京都府立北桑田高校 | 3:37:20.57 | 00:11.35 | 35.89km/h |

平成 20 年度強化委員会報告（ロード班）

（ロード班、海外ステージ優勝、ヨーロッパ参戦までの道のり）

ロード班担当

伊藤栄一郎

徳地 末広

堀 芳 彰

海外派遣選手の選手選考は、2006 年まで高体連推薦選手をそのまま J C F ナショナルチームとして派遣していた。

2006 年 6 月「チョンジュ M B C (韓国)」にはじめてナショナルチームと高体連チームを派遣した際、高体連チームは、ナショナルチームを上回る成績で総合優勝をした。このときの高体連チーム派遣のきっかけは国内の選考で甲乙付けられない選手層がいたからである。その後、高体連チーム・ナショナルチームのなかから、新しく選抜チーム（ナショナル）をつくり、U C I レースの「ツール・ド・ラビテビ(カナダ)」に出場した。この大会で、日本チームは、三浦コーチのもと、レースの主導権を握るかのような走りを見せ、「ツール・ド・ラビテビに J A P A N あり」をアピールした。

このとき総合でも上位に進出、さらに 2007 年の U C I のステージ優勝がみえたスタッフは、2 チーム参加を打診。その場で O K をもらい、2007 年のライテビは日本最強メンバーに 1, 2 年生の次年度候補生を加えた 12 名で出場した。結果は 2 ステージ優勝の快挙である。この年は、アジア選手権のジュニアロードでも優勝をしている。

この年に、J C F は「マニエ氏」をトップとした新しい組織で動くことになり、J C F ジュニア部会と高体連強化委員会は、別路線を歩むことになる。（このときに、すでに高体連スタッフはヨーロッパ進出を考えていたが。費用の面で実施することが困難であることはわかっていた。）

2008 年は高体連強化の仕事を明確にするために、インターハイを最高の目標到達点とする高等学校の趣旨と、J C F のジュニア支援スタッフの趣旨をまとめ、「1, 2 年生の有望選手を早期に発掘し、3 年生で、J C F ジュニアとして、J r 世界選手権でメダルを獲得する」とした目標と計画をたてた。さらに、ロード班は、日本での 1day レースをカバーするために、試作であるが、ポイント表を作成した。

今年の高体連推薦メンバーは、国内では、インターハイの中・長距離（トラック）、ロードにおいて上位入賞、全日本ジュニアロードレース、国体、都道府対抗ツールドおきなわ等で成果を出してくれた。海外ではヨーロッパでの U C I レース“ループリランド(スイス)”で表彰台に上がるなど、2006 年から、育ててきた 1, 2 年生選手の活躍が目立った。特に「アジア選手権、ジュニアロードレース」の

2連覇はロード班の実績として評価に値するであろう。

その背景には、2007年12月から全国合宿を実施、ロード班は、1、2年生上位12名と3年生1名の強化選手を選出。しかし個人の順位付けができなかったことや、様々な環境・コースでの走力・力量を見るために、第二次合宿として、平成20年1月17日～1月20日 奈良県奈良市布目ダム周回コース（その年のアジア選手権ロードコース）で実施した。その結果を持って、3月の全国選抜大会に臨み、大会での結果を加味して、JCFに選手を推薦するなど、スタッフの大変な努力により、選手のモチベーションも上がり、レースでの成果が出たものである。

2006年から2008年に出場した、チョンジュMBC,ツール・ド・ラビテビ、GPルーブリランド等に海外遠征での実績は過去にないジュニア選手の成果であり、今後の海外遠征、国内での合宿等の参考になると考える。

平成21年度事業計画〔案〕

| | |
|----------|--|
| ①平成21年8月 | ヨーロッパ遠征（フランス・ベルギー・ドイツ・イタリア） |
| | 8/15 V a i i e e s (FRA) |
| | 8/16 V i a a m s e g e (BEL) |
| | 8/17-19 R e g o - T (GER) |
| | 8/29 P i e t r o - M (ITA) |
| | 8/30 P a g a n e s s i (ITA) |

② 平成21年12月 全国合宿 宮崎

③ 平成21年3月 台湾合宿

5日から6日前後（トラック班と合同）

台中にあるバンクを使い台湾ジュニアチームとの
合同練習。ロードも台湾チームと合同練習

※ 学生は勉強に支障なく、引率も可能な長期休業中の時期を利用して、上記の大会に日本からオファーをかけ、検討する。

※ 12月の宮崎で実施する全国合宿で、選手を選考しきれない場合は、二次合宿、あるいは三次合宿等を考えている。